かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第４２号（令和４年４月）

楢下の永正五年板碑と墨書板碑

あゆむ「さあ、春だよ。」
ミドリ「どこかに出かけたいわね。」
ふみお「うん。でも、まだコロナが・・・。」
文じい「外にある板碑ならいいじゃろう。」
ミドリ「あら、久しぶりね。今日はどこ？」
文じい「楢下じゃ。」
ミドリ「前に、元屋敷の方に行ったけど、もっとあるのね、楢下に。」
文じい「集落の中の方で、まずこれじゃ。」
あゆむ「おお、雪がとけたばかりだけど、かっこういい碑だな。」
ミドリ「何か少し読めないかしら。」

ふみお「梵字で仏様を表す種子があるよね。」
ミドリ「あら？これは楢下元屋敷の板碑の種子と似ているんじゃない？」
ふみお「あ、そうだ。上の梵字は金剛界大日さまでバンという種子じゃなかったかな。」
ミドリ「そうね。そして、その下にも種子がならんでいるみたい。５つあったと思ったわ。」
ふみお「そうだ。元屋敷の板碑では、バン(金剛界大日)、ウン(阿閦如来)、タラーク(宝生如来)、キリーク(阿弥陀如来)、アク(不空成就如来)の金剛五大尊ということだったが・・・」
ミドリ「辞典で見ると、図ような金剛五大尊の種子がたてにならんでいるはずよね。」

ふみお「よし、上からたどって見てみよう。」
ミドリ「一番上は、なんとなく大日さまのバンという感じはするわ。」
ふみお「その下は、前の元屋敷の板碑と同じ順番ではないかな。」
ミドリ「あ、この広がっている感じの梵字は、阿弥陀如来さまのキリークじゃない？」
ふみお「４番目だね。なるほど、そんな感じだね。」
あゆむ「そうすると、その次は、アクね。」
ふみお「うん、そうだと思うけど、でも・・・」
ミドリ「その下にもう一つありそうね。」
文じい「ふむ。よく見えたのう。実は、加藤和徳先生の本によれば、最後にダ（､）という種子があるという。これは、仏様のありがたいお恵みを、人々に与えてくださるとう意味があるというのじゃ。」

あゆむ「それで、説明板を見ると、その下には、いろいろと漢字が彫られているよね。」

ふみお「千部経願主権律師有全。」

ミドリ「そして、永正五年と左右に、戊辰。そして、十月十二日法王　左右に敬白・・・か。」

あゆむ「あれ、これは主という字じゃない？」

ミドリ「そうね！願主の主だわ。」

ふみお「そうか、この碑を建立した願主の名前なんじゃないかな。」

文じい「ふむ。おそらく、権という位の有全というお坊さんの名前なのだろう。」

あゆむ「千部経というのは？」

文じい「千人の僧がお経を読む、または一人の僧が千部のお経を読むことだそうだ。」

あゆむ「うほう！すごいね。」

文じい「ふむ。敬白は、敬って申し上げるということで、永正五年は、室町時代の 1508 年。そのころの、楢下の地域における仏教文化の広がりや深まりが感じられるのう。」

ミドリ「それから、碑はもう一つあったんじゃなかった？」

文じい「そう。ほれ、ここから見える。あそこじゃ。」

あゆむ「あ、あれか？ よし 行ってみよう！」

ミドリ「すぐ近くにあるのね。でも、何が彫ってあるのかはまったくわからないわね。」

ふみお「標柱がある。楢下墨書板碑ということらしいけど。」

ミドリ「墨書って、どこかに墨で書いてあるのね？」

あゆむ「そういえば、下の方が何か少し黒っぽいな。」

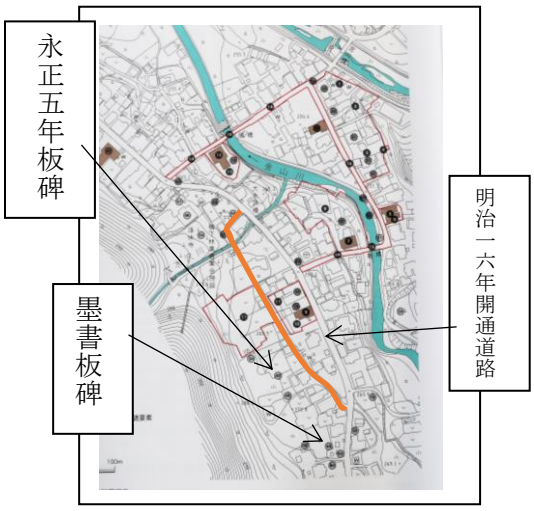
ミドリ「何も彫らないで、墨で何か書いたなんてめずらしい板碑ね。」

あゆむ「それにしても何て書いたんだろうね。」

ふみお「やっぱり、卒塔婆なんだろうから、種子と願主や願いの事、年月日などじゃない。」

文じい「加藤先生の調べによれば、慶長九年という時期らしいが、一度倒れて、それを起こしたときに墨書が見えてきたらしい。陽に合たって字が消えないといいが・・・。」

ミドリ「この２つ、道路わきに並んでいて、その先は寺に通じているわね。」



ふみお「広い道路は明治 16 年に通った新道だということだったけど、この細道は？」

文じい「この道は、昔から作場道、生活の道として村人たちが通っていたようじゃのう。」

ミドリ「牧野から、元屋敷を通って、楢下に来る道筋に次々に板碑があったということは、人々がこの道伝いにくらしていたのね。」

ふみお「ご先祖様を供養して、これからのことを祈りながらくらしていたんだな。」

発行：　上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）